としょかん通信

石狩市民図書館　石狩市花川北7条1丁目26番地　☎72-2000　FAX73-9120
HP http://www.ishikari-lib-unet.ocn.ne.jp/　✉ishikari-lib@mail.ishikari-lib-unet.ocn.ne.jp
●開館時間　火金10:00～18:00　水木10:00～20:00　土日祝10:00～17:00
花川北・花川南・八幡・浜益分館10:00～17:00　厚田分館13:00～17:00

3月の休館日

休館(月曜)　5、12、19、26日
祝日振替日　22日(木)
図書整理日　30日(金)

司書日記

"世界のオザワ"の今を知りたい！

「指揮者の小澤征爾(おざわせいじ)さんのことを調べたい」

今回の相談者は、小澤氏が病気のため療養していると聞き、その後無事復帰されたかどうか、そして、小澤氏についてほかにも調べてみたいとのことでした。

データベースで追跡する

ある特定の人物の近況を調査するには何が最も適切か―考えた末に行き着いたのは新聞です。こういう時には、『**日経テレコン21**』という、国内の80年代後半以降の新聞記事を検索できる、有料インターネットビジネス情報サービスが役立ちます。これを使って「小澤征爾」で記事検索すると、見出し一覧が出てきます。調べたいのは小澤氏の近況なので、検索範囲を過去1～2年に絞りました。すると、北海道新聞(07年1月17日 夕刊)の「金総書記・小沢征爾氏を招く？」や、毎日新聞(06年7月21日 朝刊)の「世界のOZAWA『復活』指揮 国内での活動再開」といった記事が見つかりました。

このように過去の記事を探したい時は、ぜひ調べものカウンターへご相談ください。

専門誌だからこその情報

小澤氏についての情報は、音楽雑誌からも拾うことができました。例えば『MOSTLY CLASSIC(モーストリークラシック)』(06年9月号)や『音楽の友』(06年9月号・10月号、07年2月号)の記事によると、小澤氏は帯状疱疹(ほうしん)のため療養していましたが、06年6月にスイス西部のブロネイで行われたスイス国際音楽アカデミーに講師として参加し、約5カ月ぶりに活動を再開していました。また、8月にはアメリカのタングルウッド音楽祭で、彼の古巣ともいえるボストン交響楽団を指揮しています。このとき、彼が登場した途端、会場の聴衆からはスタンディング・オベーションで「ブラボー！」と歓声の嵐が巻き起こったそうです。さすがは「世界のオザワ」。相談に訪れたお客さまも小澤氏の無事復帰を知ってほっとされたようでした。

図書館の音楽雑誌コーナー前で。"世界のオザワ"はCD『青春の小澤征爾』(BMG)など、さすがに関連資料も豊富です！

実際に聴いて・見てみよう！

小澤氏が復帰後初のコンサートで選んだ曲は、マーラーの交響曲第二番「復活」でした。「それはどんな曲？」と思いませんか。図書館には、CD・DVD・ビデオなどの視聴覚資料がありますので、この機会にぜひチェックしてみてください！

なお、OPAC(オーパック)(利用者端末)で著者名に「おざわせいじ」と入力して検索すると、彼が指揮する曲のCDや、著書、ビデオなども探すことができます。調べものをする際は、本のほかにも、雑誌や視聴覚資料などいろいろありますので、ぜひお役立てください。

(小野　愛)

第5回図書館講座

作家・佐々木譲(じょう)　講演会

「読書のすすめ―作家が語る本の世界」

『天下城』『エトロフ発緊急電』などで知られる作家・佐々木譲氏が、自身の著作の世界、本を読む楽しさなどを語ります。

日時　21日(水・祝)14:00～15:30
場所　図書館視聴覚ホール
定員　先着70人
費用　無料

1950(昭和25)年生まれ、北海道出身。代表作に『鉄騎兵、跳んだ』『警察庁から来た男』『武揚伝』など。現在中標津町に在住。

「写真家・長沢直樹(ながさわなおき) 写真展」

「石狩に吹く風　図書館にそよぐ風」をテーマに開催。24日(土)は長沢氏が来館、ギャラリートークもあります(開館時間中)。

日時　24日(土)～4月1日(日)
場所　研修室1
費用　無料

いしかり博物誌 86

長野商店の大看板

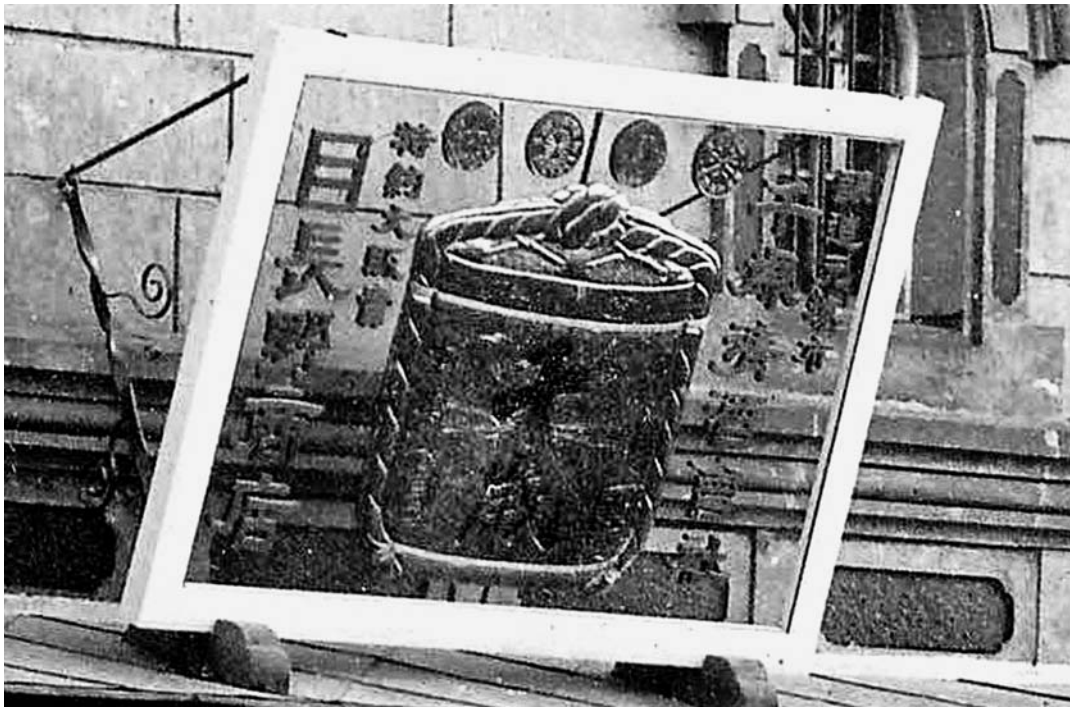

写真1　清酒「千歳」の看板

昨年からいしかり砂丘の風資料館の横で進められてきた市指定文化財旧㊐長野商店の移築復元工事がほぼ終り、内部の展示工事を残すのみとなりました。5月には皆さんに公開ができるでしょう。

写真1は、長野商店の正面を飾っていた清酒「千歳」の看板です。「千歳」は、大阪府堺市の千歳清酒会社が造っていたお酒です。このお酒は、北陸地方から北海道を中心に販売され、大阪酒の代表的銘柄として知られていました。看板は縦約1・5m、幅2・1mもある立派なもので、千歳清酒会社から長野商店に贈られたものと考えられます。

実は、明治30年代後半まで北海道で消費されるお酒の4分の1は灘、堺方面からの大阪酒でした。明治36年に「千歳」は、一樽（4斗＝72ℓ）20円くらいで売られていました。これに対し、一般の上級酒は、13円くらいでしたから1・5倍くらいの値段で売られていたようです。

「千歳」をはじめとする大阪酒は、中流以上の家庭や料理店で飲まれる高級品でした。醸造元が長野商店にこのような看板を贈るほど、石狩ではこの高級酒が売れていたのでしょう。

一方、長野商店でも明治から大正にかけて酒造りをしていました。清酒は「日の出」という銘柄で、そのほかにどぶろくや焼酎も生産しており、こちらは庶民のお酒です。高級酒を飲むお金持ちから、どぶろくや焼酎を楽しむ庶民まで、当時の石狩町は、さまざまな人たちが生活する活気のある町でした。

もうすぐ完成する旧長野商店にはもちろん、「千歳」の看板も掲げます。建物だけでなく看板からもにぎやかだった明治大正時代の石狩本町地域の雰囲気を感じていただければと思います。

（工藤義衛）

写真2　昭和12年ごろの長野商店
※写真の囲み部分を拡大したものが写真1です

復元した看板
上部の円盤は、
品評会での受賞メダル

■文化財課・いしかり砂丘の風資料館 ☎62-3711
✉bunkazaih@city.ishikari.hokkaido.jp
■石狩浜海浜植物保護センター ☎72-3240
✉ihama@city.ishikari.hokkaido.jp